

(様式 3-1)

平成 29 年度 プロジェクト研究費研究実績報告書

平成 30 年 5 月 10 日

代表者 長田 瑞恵

研究課題名	幼児の発達評価と保育の質向上に関する縦断的研究
研究期間	平成 29 年 4 月 1 日 ~ 平成 30 年 3 月 31 日
共同研究者	西脇 二葉 ・ 加藤 陽子
1. 今年度の研究概要	
<p>本研究は平成 17 年度から継続して行っている幼児期の発達と保育環境との関係、幼児期の育ちと小学校への移行期の問題、それらにかかわる保育者や保護者の意識について多角的に検討を行っているものの連続として行われた。今年度の研究では、ある特定地域を対象に 10 数年に亘りおこなった子どもの発達評価という保育の成果の質とその年次の経緯による変化、過程の質としての保育・家庭場面の影響の関連性と移行による変化を検討し、保育の質を高めるための研修や保育者養成課程における教育方法に結びつけるための実践的研究を行う計画であった。計画に基づき、今年度は、主に 3 つの研究を行った。</p> <p>第 1 に、東日本大震災の被災地の保育者と保護者、被災地以外の保育者と保護者の震災から現在に至るまでの意識変化についてのアンケート調査及びインタビュー調査の結果の分析を重点的に行った。第 2 に、東日本震災前の被災地の子どもたちの発達データと、東日本震災後の子どもたちの発達データの比較を行うことにより、保育環境の変化が幼児期の発達に及ぼす影響について、分析、考察を行った。第 3 に、被災地以外での発達評価データ収集の予備調査や、海外在住の日本人の子どもたちの発達評価データ収集のための予備調査を行った。</p> <p>以上のように、過去 13 年に亘って蓄積してきた発達評価データに、新たにインタビューデータやアンケート調査を加え、更に検討対象地域を広げることによって、より多角的視点から、幼児期の発達と保育との関係、小学校への移行期の問題について、考察をした。</p>	
2. 研究の成果	
<p>1. 保育者のインタビューデータの分析：その結果、保育者と保護者とで比較的類似して共生起している単語は「震災」「外」「子ども」「遊び」「現在」などであった。生活環境や保育環境が震災によって激変したことについて、震災直後と 5 年経過後とで比較した回答が多かった。一方で、保育者は「情緒」と「不安定」が共生起するなど、保育者としての専門的な視点から子どもの内面に言及する傾向が見られた。他方で保護者は「家族」「一緒」「母子」「避難」のまとまりや、「放射能」「心配」のまとまりが見られるなど、生活に密着した形で震災後の 5 年間を振り返る回答が多かった。</p> <p>2. 東日本大震災後の乳幼児の保護者と保育者の意識の変化—被災地ではない地域に焦点を当てた検討— 甚大な被害は受けなかった埼玉県南部・東京都北部の県境付近の住民が、震災発生直後と震災から 5 年が経過した 2016 年とで、東日本大震災と放射能災害に対する意識が変化したかどうかを検討した。具体的には震災発生時に乳幼児を育てていた保護者と、日常的に乳幼児と触れ合い、災害発生時には乳幼児の命を守る責務があると考えられる保育者に焦点をあて、子どもの発達に関して心配事があるか否か、あるとすればそれは震災発生直後と 2016 年とで変化したのか否かを検討した。その結果、子どもへの心配事としては、情緒や体力健康などを含めた将来に対する漠然とした不安が保育者にも保護者にもあること、その不安は保育者のほうが強いこと、しかし、それらの心配事の程度は決して強いというレベルのものではないということが示された。本研究の結果から、被災地ではない地域では、東日本大震災と放射能災害についての意識がかなり低い状況が示唆された。今後、その他の質問への回答との関連性の検討が必要である。</p> <p>3. 発達評価の分析：現在複数地域からデータを回収中であり、今後詳細な分析を行う予定である。</p>	

3. 研究成果の公表実績・予定（年月日、方法）

日本保育学会第 71 回大会（平成 30 年 5 月 12 日・13 日） ポスター発表及び口頭発表予定（学外共同研究者が発表責任者）

十文字学園女子大学人間生活学部紀要 2018 年度版 投稿予定

日本発達心理学会大会（平成 31 年 3 月） ポスター発表予定